神略戦争～彼女が世界を変えるまで～

hide101

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神略戦争～彼女が世界を変えるまで～

【Ｎコード】
Ｎ２８１４Ｙ

【作者名】
ｈｉｄｅ１０１

【あらすじ】
相手の嘘を見抜ける犬飼人太は路地裏で一人の少女を助ける。
神楽葵と名乗った少女には神様がとりついていた。
どうやら葵は神様と取引を行っており、他人の願いを十二個かなえないと存在を消されてしまうらしい。
人太は葵を助けることになるが……。

プロローグ

虚偽と欺瞞は人間にはつきものだ。
息を吐くように嘘をつくような人間がいる一方で、善良な人間もいる。
世の中の表に現れていることの多くはは善性から成り立っているというのは多くの人が認めることだが、実の所、裏返せば欲にまみれた救いのない成り立ちだったりもするから油断ならない。
この俺、犬飼人太はどうにもそういう裏表あるものに必要以上に反応してしまう。
有体に言えば人の嘘がわかる。
相手が嘘をついた時に解る。
どんな感じと聞かれれば説明は難しい。感覚を説明するのは苦手だ。ニュータイプとかああいう感じが近い。
この感じ……っ！といった塩梅だ。
まぁ、一々相手が嘘ついた所で反応なんか示さないけど。
この世には嘘が満ち溢れている。
時たま嘘を言っていない人間がいたとして、そういう人間は死期が近い。どうやらもう死んでしまう者に関しては俺の嘘発見機は反応しないらしい。
これが俺の生まれつき持ち合わせた力。
幼少時代は気味悪がられたし、自分もこの力に関しては扱いに困ったが、すぐに俺は順応した。これに関しては両親の教育に感謝している。
『道具は全てにおいて便利に作られている』
程度の違いはあれ、芯をついた言葉であり、幼稚園児だった俺はその言葉のお陰で自分の力を道具として定義づけることができた。
これができなければ俺の貧弱で繊細な心は粉みじんになっていただろう。

それでもこの力が俺の人格形成に多大な影響を及ぼしたのは想像に難くないだろう。実際そうだったし。
気づけば俺は人の善性よりも、人の悪性を信じるようになっていた。
真と虚を量った時、この世界は後者が上回っていたのだ。
だからこその人としてかなり終わっている人格になってしまったのだと思う。
あまり気にしてないけど。
そんな俺は旆村学院に通うごく普通の男子で、クラスではろくに話さず、友達が一人しかいない、健やかな青春を過ごす高校一年生だ。
現在は五月で皆、入学当初は学園生活に胸を躍らせていたがそろそろ非モテが現実を思い知る頃合いである。クラス内の雰囲気は非常によく、一つのことに一致団結して頑張るという非常に微笑ましいクラスだ。
そうそう。大きなトラブルが一つあった。
僕がそんなクラス内の雰囲気をぶち壊しにしてしまったことくらいかな？
だって僕ちゃんいじめとか見せごせない質だし。
みんなで一緒に頑張って一人の女の子をいじめるなんて見過ごせないよね？
だから闇討ち開始です。
夜な夜な覆面をかぶって待ち伏せてみたり、ラブレターを装ってみたりと色々やったよ。
僕はいじめていた首謀者のクラスの女の子をボコボコにして教室内につるしあげちゃいました。
次の日に二番目にその子をいじめていた男の子をボコボコニにしてトイレに転がしておきました。
三日目に次を、四日目にその次を。
五日目にもなればどうやら皆が解り始めたらしく、皆が互いを疑

い始め、クラスは互いが互いを干渉しないいいクラスへと変貌を遂げました。
ドジったのはどこかでアシがついてたってところかな？
どうやら僕が実行していたということがばれたみたいで、僕が逆にクラスの皆に責められる側に。
正直めんどくさかったので、放課後、ご丁寧に机を引いてまで待ち受けていた男子生徒達を色々と道具を使って懲らしめると、しっかりと後々の報復がないように脅し、解放しなければならないという面倒くさい手順を踏む羽目になったのは本当に失敗。次からは気をつけなきゃね。
……ととと、興奮すると僕とか言っちまうのは悪い癖だ。
気をつけよう。
ちょいとばかし自重が足りなくなっちまう。
まぁ、俺の自己紹介はこれでおしまいだ。
話は路地裏から始まる。
読んで字のごとく、裏から始まる。
王道的なボーイ・ミーツ・ガール。

路地裏であい

政令指定都市になるには人口があと二倍必要な栄えた町。
それなりに都会で表では喧騒が似合うこの町の事を俺は嫌っている。
遊ぶ所もたくさんあり、交通の便もいい、学生には天国のような町ではあるものの、人口が多いということはそれだけ人が嘘を言う数も増す。今でこそ人は悪意に立脚しているということを納得こそすれ、一度嫌いになったものを修正するのは中々に厳しい。嫌いなものは嫌いなものでほったらかしだ。
無理に好きになることもない。
本日は黄金週間最終日。
我が敬愛すべき父上殿と母上殿がデートの当日にカメラを忘れ、息子の俺にカメラを取ってこいと言ってきたため、小遣いにつられて快く了承した。
どうやら本日は遊園地でイルミネーションショーがあるらしく、俺は受付で適当に「落し物を拾った」といってカメラを預けると携帯で両親にその旨を電話して帰ることにした。電話口で感謝の言葉と受付のお姉さんに吐いた嘘に関しての少々のお叱りを受ける。至極ごもっともなので特に反論はなく、さっさと家に帰り、のんびりゲームでもして過ごすかな、なんて暢気のことを考えつつ、路を歩いている時に大きな不快感が俺を襲った。
こめかみを軽く押さえて不快感に抵抗する。
プロローグでも述べたが俺の力は相手の嘘を看過する。
基本的に俺が意識を向けた相手には有効だが、、例外が二つある。今回はその一つに引っかかったのだろう。
本気の拒絶。全身全霊の虚偽。人生のターニング・ポイントの嘘。感情が昂った状態での嘘。これらを近くで吐いている人がいる場合、俺の力はそれを感知してしまう。

不快感を与えてきた方向を見ると細い路地があった。
俺はその路地へと速足で入る。
トラブルの予感に興奮する。
こういった例外には不当な被害者という者が大概存在する。
状況を見て助けられるのならば助ける。
無理ならば国家権力様にでも連絡する。
もしも自業自得で困った状況にしていたのならば助けない。
身の丈に合った判断というのはいつだって大事だ。
二度ほど狭い路地を曲がるとその現場に出くわした。
曲がり角から顔だけだし、様子を見る。距離にして十メートル前後。
少し開けたささやかな空間には男と女の子が一人。
女の子が声をあげないのは男が持っているナイフのせいだろう。
男の風体といえば肩にタトゥー。髪は金髪。いかにも、といった感じだ。女の子の顔には怯えが浮かんでいる。
注意深く観察するまでもなく強姦されかかっている。
男が発している気は獣欲以外のなにものでもない。
「は、話し合いましょう。こんなことしてもいいことないですよ……」
女の子の呑気な言に呆れと同時に感心。
脅えきっていないのは強さの証明だ。
女の子を観察するが、帽子を深めにかぶっていて顔が判別できない。
（警察は間に合わないな……）
男の方は女の子の言葉を一切無視している。
今にも飛びかからん勢いだ。
迅速に行動しなければならない。
俺は落ちていた空き缶を拾うと音をたてないように投擲場所に移動する。
オーバーハンドで空き缶を投擲。

空き缶は男の真後ろで跳ねる。
甲高い音が路地裏に響き、二人の注意がそれた瞬間に、僕は走り出した。
男がこちらを向いたと同時に体を宙へ躍らせる。
全体重を乗せたフライング・ニードロップが男を弾き飛ばした。
急いで立ち上がり、まだ転んでいる相手のナイフを持っていた右手を全身全霊を込めて踏みつける。
ナイフを手放した。
僕はそんな男の顔面をサッカーボールキック。
爪先に男の鼻が折れる感触があり、僕は大きなダメージを確信。
男の腹に体重をかけて三度の踏みつけ（ストンプ）をする。
男が吐しゃ物を吐きだした。
相手の戦闘力を完全に奪ったと判断。ここでナイフを地面から取り、遠くへ投げる。
男は気を失っていた。窒息死しないように男の口から吐しゃ物を指でかきだしておく。さすがに殺人は犯したくない。
冷静に全ての行程を完了し、僕は女の子を助けだした。
さすがに息が上がったので数度大きく深呼吸し、息を整える。ポケットからウェットティッシュを取り出し、指をきれいにしておく。
ここまで来てようやく僕……じゃなかった。俺は女の子に相対した。
「大丈夫？」
「……な、ななな……」
女の子は体を震わせて俺とぐったりした男を見比べる。
俺は敵意のないことを示すために掌を女の子に向ける。
「大丈夫、安心して。俺は味方だよ」
「それはわかってますけど、やりすぎです！！」
可愛らしい声だ。聞いていて安心する。
「うん。とりあえずここから移動しようか」
「人の話聞いてくださいよ！」

「うん。耳には入った」
俺は携帯を取り出すと警察へ連絡をする。「強姦魔が倒れています。急いできてください」だ。
「やっぱり、聞いてない！」
「警察への連絡は終わった。さっさと行くよ」
「あ、ちょっと……！」
俺は彼女の手を掴むと路地裏を先導する。別の方向へ抜けるように移動する。同じ方向から出ようとすると万が一、気絶した男が起きて追ってこないとも限らない。しばらくして彼女は抗議の声をあげた。
「ねぇ！警察への説明は！？」
「やったってめんどくさいだけだ。特に俺はあれだけ痛めつけちまったからな。話がややこしくなる。これでも学校では優等生で通しているんだ」
「でも……！」
「もしかしてあれだけじゃ足りなかった？強姦魔にはもっと手酷くすべきという意見もあると思うけど、今の日本の法律じゃあれ以上はなかなか難しい。下手すれば殺しかねない。とりあえずあれで勘弁してよ」
「そういう話をしているんじゃありません！」
路地裏を抜けたところで彼女が俺の手を振りほどく。
「ああ、もう……一体、あなたはなんですか！」
彼女は悪態と同時に深めにかぶった帽子を取った。
帽子の中に隠れた長い髪がほどかれ、腰まで降りる。
小さな可愛らしい唇がきっと引き結ばれ、意思の強さを訴えてくる。
優しげな大きめの瞳は今は少々棘を含んでいるものの、笑えばとても愛くるしいだろう。
整った鼻立ちも大きなポイントだ。
とにもかくにも彼女は抜群の意美少女だった。

「……犬飼人太」
阿呆みたいに漠然と自分の名前を口にする。
「そうですか。私は神楽葵。先程は助けてくれてありがとうございました。けど物事には限度があると思います！あんなことしたらあの男の人、きっとトラウマ負っちゃいますよ！」
自分がトラウマを負わされる所だったのに、彼女、神楽葵は本気でそんなことを言った。
本気であの男のことを心配していた。
俺の力がこの女は本気だと告げていた。
これが俺、犬飼人太と神楽葵の出会いだった。

路地裏であい（後書き）

主人公は容赦がない。

ファミレスかいわ

「正直信じられない神経しているね！」
「奢っているのにひどい事を言う」
俺が助けた少女、神楽葵は同い年だった。彼女の小柄な外見からして歳しただろうと思っていたが、アテが外れた。
「大体、俺のことを非難している割によくも食う」
俺達がいるのはファミレスの一角。そこでとりあえず彼女のことを落ち着かせようとした。優しく奢るともと言った。ただ彼女が動揺していたり、落ち込んでいたりしていたというのは全くの誤解で、実のところ俺の介入方法に驚いていただけだった。
「あんな目に会った女の子をいきなり食事に誘うなんて大胆すぎるよ」
「ほっぺたにコメ粒つけてながら言うなよ。説得力皆無だぞ」
「え？どこ？とってとって」
葵の要望に応えてついていたコメ粒を取ってやる。
「ところで神楽さんは……」
「葵でいいよ。仲のいい人は皆そう呼ぶよ」
随分と人懐っこい娘だ。
「葵ちゃんは何であそこに？」
「犬を探していて」
「犬？」
「うん。おばあちゃんが飼っていた犬。居なくなっちゃったんだって」
「へぇ。随分と可愛い犬だったんだろうね。君のおばあさんの飼っている犬は」
「ううん。私のおばあちゃんじゃないよ。今日、知り合ったおばあちゃん」
「……そう」

説明が足りなさすぎる！
「可愛いおばあちゃんがね。大事に飼っていた犬なんだ。これは見つけてあげなきゃって思うじゃない？」
「頼まれたの？」
「うん」
「……無償で？」
「うん」
驚いた。
絶滅危惧種だ。この娘。
本気で言っている。俺たちの世代になると自分のことしか考えていないやつが大多数なのに。
「はかどってる？」
「いやー、難しいね。わんちゃん一匹って人間の半分もサイズないから。大型犬なら探しやすいのに。その子は小型犬だからね」
色々と突っ込みたいが、スルーした。
「手掛かりはあるの？」
葵は懐から一枚の写真を取り出し、俺に提示した。
「この子だよ」
「……カワイイネ」
色々な感情を全て粉砕してなんとか言葉を絞り出した。
写真に写っている犬は可愛いとは言い難い、クリーチャーのような外見をしていた。
まず目が左右で別々に明後日の方を向いているし、鼻はねじ曲がっている。口元は醜くつぶれ、その半開きの口からはよだれがだらだらと垂れている。犬種は……パグか？別にパグをクリーチャーと思っているわけではないが、一番近いのは何か？と問われれば辛うじてパグと言えなくもない。
「かわいいコーギーでしょう？」
「コーギー！？顔面スプラッタのこいつが！？」

思わず叫んでしまい、口に手を当てる。
「そんな言い方ないんじゃないかなぁ」
「あ、ああ。そうだね。ごめん」
写真を見つめながら、なんとか言葉を繋げる。
この容姿なら簡単に見つかりそうなものだ。この犬は得をしている。そう考えよう。
「この犬がいなくなのはいつ？」
「今日だよ。保健所にはもう問い合わせ済みだし、写真も置いて来たから、見つかったら連絡してくれるって」
あの見てくれなら見間違いなんて起こらないだろう。保健所に処分されることは避けられそうである。道行く人に討伐されそうな心配はあるが。
「そっか。他にアテはあるの？」
俺の問いに葵ちゃんは困った顔をする。
「それが全くなくて……」
「じゃあ、俺も協力するよ」
俺がそういうと葵ちゃんの顔はパッと明るくなり、俺の手を取ってぶんぶんと振りまわして喜びを表現した。
「ありがとう！うれしいなぁ！一人で限界感じていたんだよね！……でも、なんで協力してくれるの？」
「困った人は助けましょうっていうのは幼少時代からみんな教えてもらっているだろ」
「そっか！うん！そうだよね！」
これは本心だ。人がたとえ悪意で立脚しているといっても、善意が表立っている人だっている。偽善とかなんとか言って手を貸さないのは単なるものぐさか、他人との関係を持ちたくない人、あるいは『偽善者を叩く俺カッコイイ』がしたい人だけだろう。
「や～、優しいね。君」
「……そーかい」
つい返事に皮肉の成分を混ぜてしまう。

「？」
葵が怪訝な顔をする。そして目線が俺の横、まるで誰かが座っていますといった風に動いた。
「どうしたの？幽霊でもいるのか？」
「ん～。君、優しいって言われることに慣れてないの？」
「まぁね」
会話をはぐらかされるように言葉を紡がれる。こうされると俺の力は無力だ。
「どうして？」
「色々あるんだよ」
「……そっか」
何も釈然としてはいないようだが、葵は引いてくれた。
その後、お互いにメルアドを交換し、明日の休日に会うことにする。
丁度、友人と遊ぶ約束をしていたが、きっと手伝ってくれるはずだ。

犬飼君が去って、一人夜の道を帰っている時、彼女は語りかけてきた。
『どうして送ってもらうことを辞退した？今日、あんな目に会ったのに』
「犬飼君に悪いよ。それにあの人をけしかけたのはなっちゃんでしょ？」
『さすがにわかるか』
「わかるよ。友達でしょう？」
私の言葉に彼女は大爆笑する。
『お人良しも行き過ぎると気持ちが悪いぞ？人間』
「なっちゃんは私の命の恩人だよ。私はなっちゃんには優しいよ」

『それを差し引いてもお前は十分にお人好しだと思うがな。気持ちが悪いほどに』

そういうと彼女はかき消えた。

きっと気まぐれにまた戻ってくるだろう。

私に災厄を届けに。

ファミレスかいわ（後書き）

次回でキャスティング完了……のつもり

登校きょひ

俺は家に帰る前に、アパートの一室に寄ることにした。
今時珍しく、その子が携帯電話を持っていなかったからだ。
オートロックを解放してもらい、エレベーターで七階へ。呼び鈴を押して、屋人を呼び出す。少しするとおずおずと言った感じに扉が半分解放された。
小動物チックで見るからに気弱そうな女の子がそこに居た。不安そうな目が俺の姿を見て安堵に、いつもおどおどして警戒を湛えていた口元がふっと緩む。短く切りそろえた髪がリスのような可愛らしい印象を与えてくるが、事情を知る俺からしてみれば痛々しい。なるべく目立たないようにと人目を気にした服装がさらに痛々しさに拍車をかける。
彼女に抱く感情はいつも悔恨だ。
「や、来たよ」
そんな感情をおくびにも出さずに精一杯の笑顔を向ける。
「こんばんわ。人太君」
俺に心を許した手が扉を完全に解放した。
彼女の名は河野春。
俺が四月の末に自信が持てる全ての力を総動員して助け損ねた女の子だ。ちなみに登校拒否中。
「どうしたの？」
「ああ、運明日ちょっと野暮用が入っちゃってさ……。明日これない」
俺がばつの悪い顔を浮かべると春は頬を膨らませた。
「ごめん！人助けなんだ。この通り！」
俺は彼女の前で手を合わせ、謝罪の意を表示する。そんな俺を見て彼女は溜息。
「しょうがないよね。人太君は正義の味方だもんね」

心に疼痛。
未だ正義の味方と呼ばれることには抵抗がある。
俺はこの子を救えなかった。俺が彼女へのいじめを先導する人間を懲らしめた時には全てが手遅れだった。度重なるストレスで彼女の心はとっくに壊れていた。たったの一カ月。それでも人の心を折るには十分な長さだ。正義の味方なんていない。特に俺はそんなものになれもしなければ、夢も見ていない。
それでも俺は彼女の前では正義の味方であり続ける必要があった。
彼女には依存できる誰かが必要だったのだ。
俺の可愛い妹が聞いたらきっと一笑に伏すだろう。
「それでお詫びにこれを献上しに来たのです！」
俺は手に持った結構、上等なプリンが入った箱を彼女の目の前に差し出す。
「わぁ！これって駅前にあるプリン専門店の！手に入れるの大変だったでしょう？」
春が驚きつつ俺のさし出した箱を受け取り、中を改める。二つプリンが入っていることを確認し、春は俺を中に招いた。
「用意するから居間で待っていて」
トコトコとキッチンに引っ込む姿を見つつ、居間へ移動する。
こんな日常のやり取りをするのにゴールデン・ウィーク全ての日数を使った。いじめの解決をしたのが四月末。それから俺は毎日彼女の所に通い詰めた。初めは俺の差し入れも受け取ることを抵抗していた。彼女は他人の善意を受け取ることができなくなっていた。きっと、俺以外の人間からは今はまだ無理だろう。
殺風景なリビングも見慣れたもので、俺はいつも座っている定位置へ移動する。彼女の家族はみな海外で生活しており、この家は彼女しか住んでいない。しばらく待つと春はお盆を持って危なっかしい足取りで居間に入ってきた。こけそうだ。助けに行きたかったが、我慢する。彼女は特に人に触れられることを好まない。触れられなくなってしまった。何かの拍子で接触してしまうと、お盆をひっく

り返してしまう可能性がある。
「……ふぅ」
たどたどしい足取りだったが、なんとかテーブルまでたどり着く。
彼女はバランス感覚が壊滅的だ。
「ごめんね。遅くなっちゃって」
「気にしてないよ」
彼女も俺が気遣っていることは分かっている。一歩間違えれば俺に対しても必要以上の罪悪感を抱き、悪循環に陥るほどに彼女は追いつめられている。出来るだけリラックスするよう、優しく見えるように顔の表情筋を総動員する。
元々、作り笑いは得意だったが、彼女の家に通うようになってからなおさらに鍛えられた気がする。
「俺達、友達だろ？」
俺の言葉に春ははにかむように笑う。笑うと彼女は本当に可愛い。クラスに居た時の能面のような顔とは大違いだ。
春が紅茶を入れ、席に着く。彼女は料理の腕が絶品で、それは飲み物に関しても発揮されている。今の状況が解決すれば、どこにでもお嫁に出すことができるだろう。
「おいしいね」
「ああ」
「人太君」
「うん？」
「毎日ありがとう」
「ああ」
俺からは決して「学校に行こう」とは言わない。カウンセリングの基本だ。彼女も今の状況が駄目なことくらいわかっている。彼女自身、学校には行きたいのだ。『あの連中』には俺が十二分な制裁を加えた。退学まで追い込んだやつもいる。彼女に何かが起こることはないだろう。俺は彼女に『あの連中』に加えた手段を伝えていないが、彼らの末路は教えた。

その瞬間から、俺は春の正義の味方になってしまった。
俺が実行したとは言わなかったがカンのいい子だ。解るのだろう。
「明日ね。外に出てみようと思う」
俺は彼女を見ると、意を決したかのような張りつめた表情をしている。一週間以上、彼女は家に引きこもったままだった。
「そうか。俺がいなくても平気か？」
「平気」
間髪いれずに平然と彼女は言った。
嘘だ。
俺の力がそれを教えてくれる。
どこも平気ではない。
出来ないことをするにはいつも覚悟と痛みが必要だ。
「わかった」
学校はサボることにしよう。
葵ちゃんとの約束は夕方からだ。
さっき「来られない」と言ってしまったから実際に顔を出すわけではなく、見守るだけ。
学校を一日休んだくらいで一々何か言われることもないだろう。
どの道、あそこはつまらない場所だ。

登校きょひ（後書き）

週一ペースを守り切れるのがあやしくなってきました。

翌日けっか　春

翌日、春のマンションの前には意外な人物がいた。
「おっす」
葵が右手をあげてこちらに歩み寄ってくる。
「何で君が？」
「うん。犬を探している途中。偶然だね！」
へらへらと呑気に笑う彼女の両手には直角に折れた針金が握られていた。
「なにそれ？」
「ダウンジングだよ！」
それは見ればわかる。探し物を思いながら歩くと探し物がある方角を向いたときに両手に持った針金が開くというオカルトだ。そんなもの頼りにしてどうする。いや、俺の力もオカルトか。
「成果は？」
「出ないね！」
一々テンションの高い娘だ。
「学校はどうしたの？」
「始まってない」
笑いながらそんなことを言ってのける彼女は大物かアホだ。
「そんなわけあるか」
「ホント、ホント。私、こっちに越して来たばかりでさ。転校手続きまだ済んでいないんだよね～」
「ああ、他の地区から来た人なんだ。どこから来たの？」
「隣町だよ。でっかい病院がある……」
「あそこか」
一度、盲腸になった時に世話になった。設備も整っている大病院だ。
「そういう人太君はなんでここにいるのさ？学校は？」

「そんなことよりも大事なことがあるから休んでいる」
「……ほ〜、言い切ったね。清々しいね。そういうの私、好きだよ」
そう言って彼女は俺の方をバンバンと叩いた。結構、痛い。
「で、大事なことって……」
俺は質問を続ける彼女の手を取ると、塀の影に隠れるように先導した。
「ちょ、ちょっと……」
「しっ」
人差し指を唇にあてて、発言を制する。
慎重に顔をのぞかせてマンションのガラス張り自動ドアを注視する。ガラス製の扉の向こうに立つ小柄な少女は春だ。地味目の服装に顔には恐れの色。彼女にとって外界は敵の巣窟だ。前に立てば勝手に開く全自動の扉はそれでも彼女にとっては恐ろしく重い扉だ。
「へぇ、なるほど」
ぐにっとした感触が背中に当たり、俺の体に緊張が走り、体が強張る。葵が俺の背中に乗っかる形で春のことを覗いていた。
「おい、胸当たってんぞ」
「ああ、うん」
まるで人の話を聞いていない。
「あの娘の為？」
俺は無言で肯定すると彼女は俺の頭を掌で撫でる。
「やっぱいい人だね」
「……そりゃ、どーも」
春はまだ外へ踏み出さない。
こちらからでもわかるくらいに息が上がっている。
顔面も蒼白だ。
それでも俺は彼女の傍にはいかない。
甘やかすのと助けるのは別だ。
平等という言葉はきっと強者がつくった言葉だ。

支配する側、力を持つ側が弱者に対して耳触りのいい言葉を必要とした時にこの言葉が生まれたのだと俺は信じている。
楽しい学園生活？
甘酸っぱい恋愛？
そんなものが都合よく転がっているのならば誰しもが幸せになっている。
この世は不平等が当たり前だ。
何か一つの弾みで、それが例え取るに足らない出来事でも人生を転落させることだってある。
春が虐められる切欠は彼女が虐めグループのリーダー的存在――勿論、当時はそんなグループはなかったが――の足に躓いて転んだ事だ。
あの女もその時はわざとではなかったろうが、とにかくそれがきっかけだ。
そんな取るに足らないことで楽しい思い出を作るべき高校生活がいきなり座礁した春を指して他の生徒と平等とは絶対に言えない。
どろりとした黒々強い灼熱が俺の胸を焦がした。
何でくだらないことで人は躓かなければならないんだ。
僕はそんなことを見過ごせない。
「こら」
ぺちりっと頭に軽い衝撃。葵が俺の頭を掌で軽く叩いたのだ。
「いい人がそんな顔していたら台無しでしょ」
よっぽど俺は恐ろしい顔をしていたのだろう。
「……ふん」
俺と葵はかなりの間無言で春を見ていたが、彼女がその日、自動ドアをくぐることはなかった。
それでも今度会った時、褒めてやろう。
彼女は精一杯やった。
俺以外、彼女を褒めてやれる人はいないのだ。

翌日けっか　春（後書き）

すいません少し遅れてしまいました。

翌日けっか　葵

「学校はどうするの？」
もう昼時だ。今更、学校に顔を出しても面倒なだけだ。
「行かないよ。結構、時間もたつし……ほら、せっかく会ったんだからもう探し始めよう」
「そうだね」
意外なことに彼女はあっさりと俺の提案を受け入れた。彼女のようなタイプは非難してくるかと思ったのだけど。
「ところで人太君。一緒に探してくれるのは嬉しいんだけど何かあてはあるのかな？」
「地道に張り紙だな」
俺は鞄から夜なべして作ったポスターの束を取り出す。昨日、印刷しておいた迷子犬の情報募集ポスター。犬として認識されるかは不安だが、犬探しなんてこうして地道にやるしかないだろう。
「おお、綺麗にできてるね。いいよー。かわいいよー」
この幻想世界にしかいなさそうなクリーチャーの顔面を彼女は本気で可愛いと思っているらしい。
「とりあえずこいつをそこら辺に張っていこう。元々いた所からそれほど離れていないと思うから、そのおばあさんの家を中心にぐるりとね」
「そうだね。これもあるからきっと見つかるよ」
彼女はそういうと、両手に握った針金を見せびらかすが、俺はそれを取り上げた。
「ああ～、返して、返して」
彼女はぴょん、ぴょんと俺が頭上に掲げた針金を取ろうとするが届かない。
「こんなもので見つかる訳ないでしょうがっ！」
「私、霊感強いんだよ！」

「今までの結果は？」
「それは……」
彼女は飛び跳ねるのをやめて、うなだれる。
「こういうのは地道にやっていくしかないんだよ」
「張り込みと聞きこみか！あんパンと牛乳を用意しないと……」
結構形から入る娘なんだな。
「馬鹿言ってないで行くぞ」

お互いに私服と言うこともあり、誰も俺達のことを気にも留めなかった。
つくづく制服で家を出なくてよかったと思う。妹と両親の目を逃れて家を出るのは少し骨が折れた。
「人太君、老け顔だもんねぇ」
「ほっとけ」
ポスターを電信柱に張り付けながら、道行く人にちょこちょこ話を聞いて回る。皆、あの写真を見た時の反応は似たり寄ったりだ。皆、まず犬であることを疑っていた。下手をすれば悪戯で通報されるレベルである。電柱への張り紙だって無許可だし。
「ほら、次行くぞ」
「まってよ！」
彼女はとても快活な少女だ。
行動や言動がバイタリティに満ち溢れている。
少なくとも俺は彼女に対してそんな第一印象を抱いていたし、これからもそれが動くことはないだろう。こういったパートナーは横に居ると心強い。俺にはない明るさを持っているからだ。
俺にこの明るさとバイタリティがあれば、もっと他のやり方や見方もできるだろうか？
ここまで考えて首を横に振る。

気にしても仕方がない。
結果は既に提示されている。
俺の人生観は既に決定づけられていて、俺はそれにのっとってあらゆる行動を決定した。
今更、変えられるものか。

夕刻となっても、大方の予想通り、犬は見つからなかった。
あんなみょうちきりんな犬が人の目に着けば何かしらの騒動になっていてもおかしくない。
「みつかんないねぇ」
「そうだな」
彼女と俺は河原に寝そべって休憩していた。
「……おばあちゃんにはすぐ見つかるって言ったのに」
ぼそり、と。注意して耳を傾かなければ聞き逃すレベル。
彼女の呟きは落胆よりも悔しさがにじみ出るものだった。
「なんでそんなに気にするんだ？」
妙に気になって問いを投げると、彼女はびっくりしてこっちに顔を向けた。
「聞こえてた？」
「まぁ」
「なんと破廉恥な！」
「何言ってんだ！わけわかんねぇ！」
「人太君は盗聴の才能があるね」
「ば、ばかいうなよ……」
実際、盗聴器を仕掛けたことがあるので動揺してしまった。
彼女はそんな俺を見てケタケタと笑うと、天を仰いで息をついた。
「だって、おばあちゃんには残された日は少ないんだよ。愛犬とは一日でも長く一緒に居てほしいじゃない」

「……病気なのか？」
「元気だよ。すごく健康体。今日も柿を取りに行っているんじゃないかな？」
俺はガックリと肩を落とす。デリケートな話なのかと思い、気を使おうとしたが、無駄だった。
「そういう態度は感心しないなぁ」
「……そう言われてもな」
俺がそういうと、彼女は立ちあがり、寝そべっていた俺の上に覆いかぶさるような体制を取った。突然のことで俺は反応しきれない。俺の頭の両サイドに彼女の手が置かれ、顔が至近に迫る。
「人はいつか死ぬよ」
彼女の目が俺を離さない。
「いつ死ねば人は納得するの？」
「……さぁ？」
考えたこともなかった。俺だって十代の若造だ。死を考えるには早すぎる。学校の道徳でそういった授業はあったが、早くから理想論だと切って捨てていた。
「毎日納得して生きていれば、きっと安らかだと思う」
「人それぞれだろ？」
「それでも私はそう思う。おばあちゃんは、私達より、早く死ぬ」
「……わかった」
俺がそう答えると彼女は満面の笑みを作って俺の上から体をのけた。
いい匂いだったな。
「明日は学校行きなよ？」
「ああ」
彼女の手を取り、体を起こす。
「それじゃあ、また明日の夕方にここで」
俺は地面に向けて指を指す。
「おっけぃ」

彼女はサムズアップして応答した。
俺はそれを見ると手をあげてその場を去ろうとした。
彼女は命を大事にするたちのようだ。
それに関してはとてもいいことなんだろう。
それにしても……。
「過剰反応だな」
女の声に、葵の声に思わず振り向く。
夕闇の下、彼女は別人のようだった。
「また明日」
俺の本音を言いあてた彼女は薄く笑い、俺に背を向けた。

翌日けっか　葵（後書き）

多分、これからこっちは不定期に書くことになると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2814y/

神略戦争～彼女が世界を変えるまで～

2011年12月11日01時00分発行